

「ニホンスイセン」

廣瀬清一 事務局

冬の朝は、澄んだ空気がきりと頬を刺し、体の芯まで冷え込む。冬枯れの庭では、軒下のスイセンが冬の冷気をもとせず、細い葉を凜と空へ向かって伸ばし、茎の先に白い花を誇らしげに咲かせている。

花の中心に灯るような黄色の副花冠は、寒さに縮こまった心に何かを言いたげだ。花は風に軽く揺れ、澄んだ香りを遠くまで届ける。爽やかなグリーンフローラルに、透明感のある甘くフルーティな香りが心を和ませてくれる。

水仙の 香や日向より 来るとし 作者未詳



写真*

スイセンには12月から2月にかけて咲く品種と、3月から4月に咲く品種がある。改良品種は数多いが、ニホンスイセンは染色体が三倍体のため結実しない。

ニホンスイセンの学名はナルキッソス・タゼッタ・シネンシス (*Narcissus tazetta* L. var. *chinensis*)。スイセンの原産地はスペイン、ポルトガル、北アフリカなどの地中海沿岸地域である。

スイセンの学名は、ギリシャ神話の美少年ナルキッソスに由来するという説がよく知られている。

ある日、森の泉で喉の渇きを癒そうとしたナルキッソスは、水面に映る美しい水の妖精の姿を見て恋に落ちる。しかし抱きしめようとすると波立って姿は消え、静まるとまた現れる。

それが自分自身の姿であるとは気づかぬまま恋い焦がれ、ついには痩せ衰えて命を落とし、その姿がスイセンに変わったと伝えられている。その悲恋の物語が、スイセンの静かな佇まいにどこか影を落としているようにも思える。

そんな神話を持つスイセンは、はるか西方から旅してきた花でもある。

ニホンスイセンはシルクロードを経て中国に渡り、そこから海流に乗って日本へ流れ着いたとされる。現在も越前海岸や伊豆半島などの各地の海岸で群生している。

静岡県下田市の爪木崎は、約300万本の野水仙(ニホンスイセン)が咲き誇る関東近郊の名所で、毎年1月上旬から2月上旬にかけて「水仙まつり」が開催されている。

和名の「水仙」には大和言葉の名がなく、中国名「水仙(shuǐxiān)」を音読みしたものである。「仙人は、天にあるを天仙、地にあるを地仙、水にあるを水仙」とする中国の古典に由来し、水辺に育ち、仙人のように長寿で清らかなことから名付けられたとされる。

スイセンの名は「万葉集」には登場しないが、日本の歴史にスイセンが現れるのは室町時代で、安土桃山時代にはすでに生け花の花材として用いられていた。

スイセンは冬の茶室で特に人気のある花卉である。冬から春にかけて咲くスイセンは、その可憐な姿と香りで、茶道やいけばなに欠かせない存在となっている。特にニホンスイセンは寒さに強く、正月飾りとしても親しまれている。

茶室の装飾や花材として、冬の風物詩としての役割を果たし、文化的な意味合いも深い。

ニホンスイセンは「雪中花」の別名を持つ、香り高き冬の使者である。

参考文献

- 1) 財団法人相模原市みどりの協会 園芸豆図鑑 Vol.11 スイセン
- 2) 秦寛博 花の神話 新紀元社 2004.9
- 3) 北野雅史 ニホンスイセン写真* 青山花茂本店 HP